

四季  
季子  
五律

~Face your faith~



第一部・ふたりの四季

あれは孝徳帝、あるいは斉明帝の御代だっただろうか。いずれの御代にせよ、もう随分と昔のことだ。それでも、あの日のことは鮮やかに覚えていてる。

いや、決して忘れえぬだろうと、彼女はひとりごちた。

中大兄皇子なかのおおえらが主導いっししたと伝わる乙巳いっしの変から始まる政治的混乱えみしは、蘇我本宗家の蝦夷えみし・入鹿親子いるかや、彼らに近い皇族ふるひとのおおえ・古人大兄皇子ふるひとのおおえといった人々を肅清するだけに終わらず、クーデターの中心メンバーである蘇我倉山田石川麻呂そがくらやまだいしかわまろなどをも死に追いやった。

この間、天皇と豪族たちによる統治は過酷を極め、民衆は翻弄ほんろうさ

れ続けることになる。東北地方への侵攻のための基地の建築に毎年徴用される人々。これらは仕事ではなく税の一部という形をとられたため、給金などが払われることはなかった。しかし、拒否すればそれ以上の罰が待っている。

力のない民衆は、支配者たちの際限ない欲求に頭を垂れて従う以外の道は残されていなかった。

「おい、聞いたか。今度は西で城邑じょうゆうの建設が始まるらしいぞ」

「は？蝦夷地とは逆の方向じゃねえか。どういうことだよ」

「唐が新羅しらぎと組んで高句麗こつくりと戦争をしているとか。だから帝みかどは万一のことをお考えになったそぞだ」

「高句麗が終わったたら百済くだら、そして最後はこちつてことか？冗談じゃねえな…」

都みやこの雑踏おほの中、武官ぶくわんと思しきふたりがそんな会話を続けている。彼らの背後、赤い麻服を着た緑髪の女性が、自分たちとまったく同じペースで歩いていることには気づかずに。

「そう…蝦夷地も良かったけれど、あれもいることだし、西に行つて

みるのも良いかもしれないわね。面白い人間や妖怪には会えるかしら」

彼女はそう小さくつぶやくと、雑踏に紛れ、気がつけばその姿は霞のように消えていた。

その年は例年以上に雨量が少なかった。元々四国は水利が良い土地ではなく、春から夏にかけての雨量が人々の生活を左右する。

そこに今回の微発である。資産のあるものは賄賂を贈って労役を回避すればよいが、貧しいものはそうはいかない。飢えと渴きに耐えて務めを果たすか、行く当てもないのに土地を離れるか、だ。

労役の中で死ぬか、野垂れ死ぬかの二択のようなものだ。

「これは…なんという」

唐服を着た女性が、沈痛な面持ちで荒れ果てた大地を進む。干上がってひび割れた土地の上にはみすばらしい家屋が並んでいるが、いずれにも生活を感じさせる気配はない。

それどころか大半の家屋は燃えた痕跡、あるいは内部が収奪にあつた跡がある。

「この国も唐土・天竺と同様。いえ、それ以上に…」

山論・水論というものがある。隣りあつた集落同士が山・川の領有や取り分の割合に関して揉めることだ。十七世紀に入るまで、日本ではこの解決に武力が用いられることが多々あつた。

平時ならば話し合いで済むかもしれないことも、このような干ばつときにはそうはいかない。小さい共同体同士が、互いの存亡を賭けて殺しあうのだ。

「ああ、このような幼い命が」

彼女は衣服が汚れるのも構わず、ひざを突いて無造作に転がる少女の遺体に手を伸ばす。

肉体を虫によつて食い尽くされたその軀はあまりに醜く、辛うじて判別できる顔の輪郭が浮かべている苦悶の色も加わって、普通の人間であれば正視できないほどの嫌悪感を与えている。

「そうですか、まだ死を受け入れられてないのですね」

遺体に残る、虱のわいた頭髮をやさしくなでる。

「もう泣く必要はないのです。大丈夫、ほら目を閉じて…」

わが子に接するかのような慈しみの笑みを浮かべ、あやすように温かい言葉をかけていくと、遺体全体がぼう、と一瞬白く輝いた。

「おやすみなさい。せめて今だけは安らかに」

むき出しの頭蓋骨をゆっくりと数度叩くと、彼女は立ち上がって両手を広げる。

「さあ、貴方たちもさまよい続けてはいけません。彼岸にゆかぬはそれだけで罪。死してなお罪を重ねる必要はないのです」

すると彼女の語りかけに呼応するように、白い靈魂が野ざらしになった死体から、そして炭化した草木から現れた。

「逝きなさい。この世における業を清めた後、貴方たちには次の生が待っているのですから」

そのまま光となって消えてゆくもの、しばし逡巡しゆんじゆんするように震えた後に消えるもの、反応はさまざまだったが、最終的にはすべての靈魂が彼女の語りかけに応えた。

「そう、それで良いのです。…ささようなら」

すべての靈魂が消えるのを見届けると、彼女は小さくつぶやいて歩

き出した。

生物は死ぬと三途の川から彼岸へと渡り、閻魔の裁きを受ける。絶対的な法規によって生前の功罪を裁かれた靈魂は、天国あるいは地獄、そして転生を待つ冥界へと振り分けられる。

天国へ進めるものはごくわずかで、大半のものは冥界か地獄へ進む。冥界に進むことが出来れば、次の生を得るまでの間は平穏な日々が続くが、地獄送りとなればそうはいかない。

多くの責め苦を与えられて生前の罪を清算させられ、その後によく冥界で次なる生を待つことを許されるのだ。

「彼女のように功德をほとんど積むことなく死んでしまえば…」

先ほど最初に成仏させた少女のことを思い出す。当人の自覚がなくとも、生きていくということは罪を繰り返すことだ。だから幼くして死ぬということは何よりもむごい。覚えもないまま地獄へと送られ、賽さいの河原かわらで石を積まされることになる。

仕方がない、そういうシステムなのだ。生物の生死を管理する彼岸において例外などは許されるはずがない。

しかしそれでも、と彼女は思う。それでも弱き魂を救済したい。弱

いものは弱いからこそ、安易に低きに流れる。先ほどの村落を襲撃した村落だって規模はそう変わらぬもので、そうしなければ手をこまねいて死を待つ結果になったことは想像にかたくない。

だが大罪を犯して得た時間は、決して罪を清めてはくれない。犯した罪を忘れることはできるだろう。人間はそれを時間が解決してくれると言ひ換えるが、そんなものは彼岸には決して存在しない。

「弱者同士のいさかいは互いを疲弊させる。力あるものはそれに乗じてより肥え太り、神をも気取って自らこそが公的な政策を行っているのだとおごりたかぶる」

彼女は言葉を紡ぎながら森へと分け入っていく。地面を眺めればコケの上に雑草が、雑草の上に花が、花の上には樹木が伸び、さらにその上へと視線を移せば大樹がそびえている。

これも同じことだ。雑草が多く茂っている場所の下を覗いてみれば、白く変色し乾燥したコケが見える。人間の営みと何も変わりはない、弱いものがより弱いものを虐げてなんとか自分の繁栄を確保しようと必死になっている。

「そしてその階層の頂点にいるのが貴方、ですか」

別にとがめるようにはなく、ただ淡々と事実を確認するように彼女は眼前の木を見上げた。

森の中、少し開けた場所にそびえるのは一本の巨大なクスの古木。幹の円周が二十メートルを優に超え、高さが三十メートルに達しようかというスケールで、周囲を圧倒している。

別に彼女は古木を咎めようというわけではない。様々な因果の果てに他の追従を許さぬほどの巨体になり、この森林の頂点にある。望むと望まぬとに関わらず、その過程で多くの罪を重ねてきたのは事実だが、幹から感じる気の流れは邪悪ではないのだから。

彼女はしばらくその威容を見つめた後、小さく嘆息して口を開く。「いい加減に姿を現したらどうですか。付け回すのが趣味、というわけでもないでしょう」

「あらごめんなさい、声をかける機会を計っていたのだけど、先を越されてしまったわね」

巨木の裏側より出てきた女は、謝るように軽く頭を下げて、彼女を見下ろす。雨でもないのに傘をさした相手が、自分に似た髪の色をしているのに、見上げる女は気づいた。



「はじめまして、私は風見幽香というしがない妖怪よ。極東こんとうでクシテイガルバに会えるとは思っていませんので、つい失礼してしまっただの」

木漏れ日を傘で受けながら、幽香と名乗った妖怪は眼前の神霊を見つめる。対して彼女も軽く会釈を返し

「この国や唐土の言葉では地藏菩薩と呼ばれています。私の名前は四季映姫しきえいき。地蔵クシテイガルバの四季映姫です」

そう名乗り返すと、幽香は意外そうな表情で映姫を見つめ、映姫の前に下りてきた。

「これは奇遇ね。私も四季の花操者なんて二つ名で呼ばれることが多いのよ。そして貴方は、めぐる四季のいかなるときにも映はえるお姫さまなのね」

右手を胸にあてて、うれしそうに微笑む幽香の姿。

「折々の花を操る妖怪ですか。貴方はずいぶん風雅な能力を持っているのですね。そうですね…森羅万象は縁えにしによって結ばれています。

ここで出会った私たちが共通する名を持つのも、ひとつの縁なのですよ」

対して小さく目元を緩めて返す映姫の姿。

それがふたりの出会いだった。

「なるほど、それでこの国にやってきたのね」

「ええ、私だけではありません。多くのものがこの国へと渡ってきています」

「それは楽しみねえ…フッフツ」

野蠻な笑みの幽香と並び、映姫は古木の木陰に腰掛けている。

日本に仏教が伝来してからおよそ百年。徐々に仏教の受容が広がっていく。弱者救済の象徴である地藏菩薩が広まるまでは、まだ三百年以上のときを要することになる。

「何が楽しみなのですか？」

「それだけ多くの神霊がやってくるということは、武に長けた存在も

多いはず。私のお目当てはそれなのよ」

「妖怪であるあなたが神仏を襲うのですか…」

何か問題があるの？といった具合に肩をすくめる幽香に対し、映姫はため息ひとつ。

「野蛮な行為に耽ること自体は罪ではありません。むしろ妖怪にとって人間に恐怖を与えることは勧められるべき善行です」

人間にとっての善が、すなわち妖怪にとっての善となるわけではない。恐怖や負の感情を糧にする妖怪にとって、功德のひとつが映姫のいったことであるのは事実だ。

「しかしながら貴方が神仏に威を振るうということは、功德ではなく罪となります。これは妖怪や妖精に対してであっても、変わりません」  
「ふうん…変な線引きね」

「何が功德で何が罪であるかを決めるのは、閻魔の職分です。死後の世界で絶対的な力を持つ彼らに現世でいかに抗おうと、最終的には彼らの前に引きずり出される」

当たり前のことだ。それが秩序であり、何者も干渉しようのない世界のあり方。

だが、それを言っているときの自分の胸は、なぜこうも苦しいのだろうか。

映姫は再びため息をひとつ。

「貴方の力が強大であるのは良く感じられます。恐らく私のような存在とも渡り合うことは可能でしょう」

「あら、評価してくれるのね」

「無論です。しかしながら妖怪は長命。ゆえに必要以上に罪を重ねてしまうのです。結果として、地獄の中で塗炭とたんの苦しみを永ながきに渡って味わうことになる」

「私もその例外ではない、というのね」

その通り、と首を縦に振る映姫。弱者の救済を第一に考える彼女だが、強者を捨て置いて良い、とはいかない。

「その行いを、改めるわけには行きませんか？」

「無理ね。私の存在事由だもの」

「即答ですか」

「貴方にさつきみたいなのを止めるといっても聞かないでしょう。それと同じよ」

笑みを崩さぬままそう返されてしまうと、更に取り柄をつかざるを得ない。

映姫が同じようなやり取りをした相手は数多。その中で行いを改めたものも多いが、改めなかったものが多いのは言うまでもない。「聞かぬのならば力ずくで……とか楽しいことをいつてくれたりはしないのよね?」

「地藏菩薩たるものが率先して他者を傷つけるなど、ありません。もちろん必要とあらば鬼や夜叉にも変化して対象を導かんとしますが、それは別のことです」

「そうよねえ、と残念そうに幽香はつぶやく。彼女はいつも戦うことばかりを考えているのだろうか、映姫は首をかしげた。

「そこまでして強者と戦いたいのですか」

「そうよ。相手が同族だろうが、人でも神でも構わない。力ある存在との闘争こそ、生の実感だもの」

「なるほど。野蠻で癡猛な思考ですが、それゆえに力弱きものを執拗に蹂躪するような心配はなさそうですね」

「あくまでもそこが基準なのねえ」

幽香は苦笑する。地藏菩薩というものは、なんと七面倒くさい思考をするのだろうか。大きな力を持ちながら、常に最底辺の存在のことを意識しているのだから。

「妖怪が暴威を振るって恐怖与えることと、殺戮をすることはまったく違います。この履き違いは大罪となるのですよ」

「殺戮ねえ。それも遊びのひとつではあるけど、戦う気がない相手をやっても面白みは少ないわ」

「相手が挑んでくれば別、ですか」

「それは当然、相手が愚かだということだわ」

無知無明は罪なのだ。その結果としての死を与えたとしても、幽香の罪にはならない。

「ええ。今の件に関しては貴方の言が正しい。正しいのですが……」

「できれば殺さないでほしい?」

「はい」

「気が向いたらね」

無理と即答しなだけでマシかと映姫は苦笑する。まだ出会って時間もあまり経過していないが、この相手はどうやら少しひねくれている

らしいと、彼女は感じていた。

そう思つて眺めていると、幽香も映姫のを見て苦笑している。

「難儀な性格なのねえ、貴方」

「そう、でしょうか」

「だって力で屈服させて、強制したりしないんでしょ」

「行いを改めるということは、心を改めることです。心を偽り、行動を取り繕うことではありませんから」

だからこそ彼女の道は険しいのだろうと幽香は思う。そこまでして何か得るものがあるのかまったく理解できないが、それは相手にとつての自分も変わりはない。

「まあなんにせよ健闘をお祈りするわ。それに…」

「それに？」

「さつき燃え尽きた草花たちも彼岸へと導いてくれたでしょう。ああいう行為は、私にとつて非常に好ましいものなの。ありがとう」

「どういたしました。当然のことをしたまで、ですが」

それでもいいのよと幽香が笑うと、映姫も釣られて笑う。

「フフ、フフフ…」

「ウフフッ」

ひとしきり笑いあうと幽香は立ち上がり、今までもたれかかっていた古木に手をかけた。

「それじゃあ午睡の時間を邪魔したわね。また来るわ」

「折に触れてここを訪れるのですか」

「これだけのコはなかなかいないのよ。だから数十年に一度、だけでもね。で、こうして貴方にも会えたから、感謝しないといけないわ」

「なるほど…では私からもお礼を言わねばなりませんね。ありがとうございます、またいずれお会いしましょう」

続けて立ち上がった映姫が木の幹に触れてそう言うと、ふたりに応えるかのように枝が揺れた。

「ほら、どういたしましたって言っているわ」

「本当ですね。律儀な方」

幽香は西に、映姫は東に。それぞれ歩を進めてゆく。

「ではね。弱者を愛するお姫様」

「それまでに功德を積んでおいてくださいね、花を愛する妖怪さん」  
肩越しに視線を交わすと二度と互いを振り返ることがなかった。